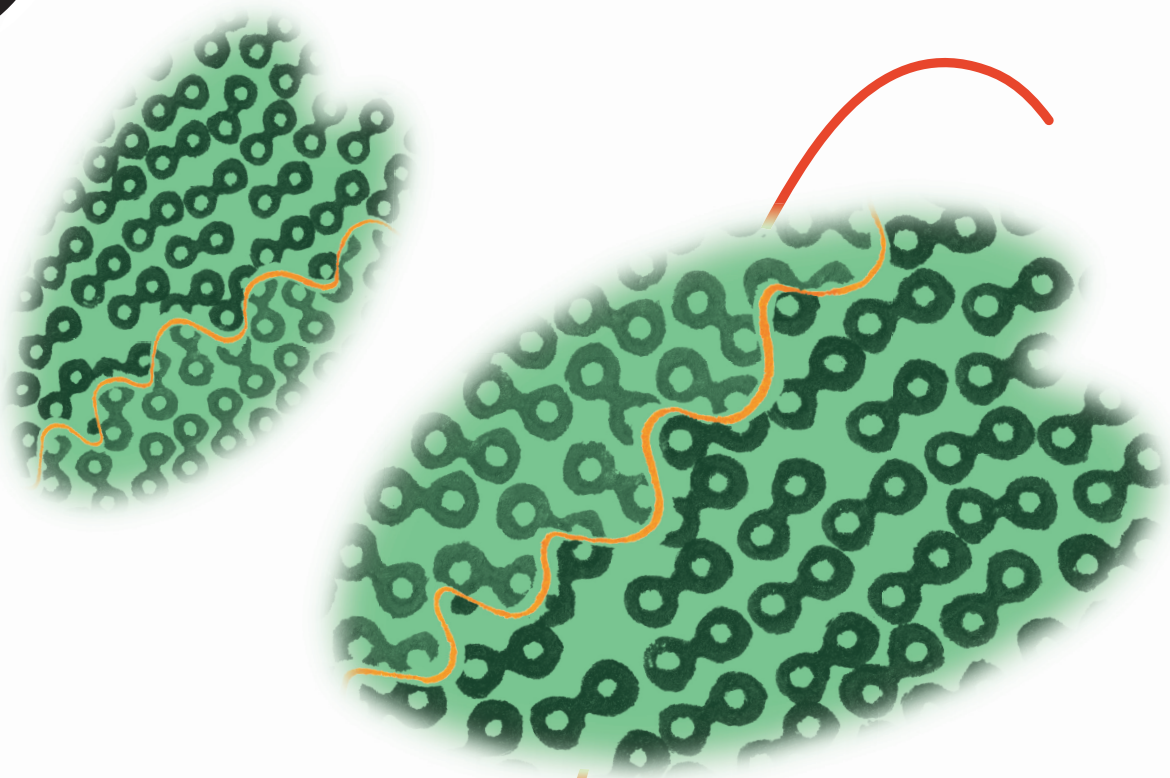


NBF

Information

2008
Summer
No.34



◆名手訪問／対談

吉田正道

(臨済宗建長寺派第240世管長)

◆日本舞踊誌上講座／日本舞踊の歴史を振り返る⑩

東京大学 文学部 教授 古井戸秀夫

◆講演会／茶の湯と日本文化

熊倉功夫

◆NBF活動報告

◆理事会、評議員会報告・役員等名簿

◆平成19年度収支決算書

◆特別会員芳名

◆NBF行事予定

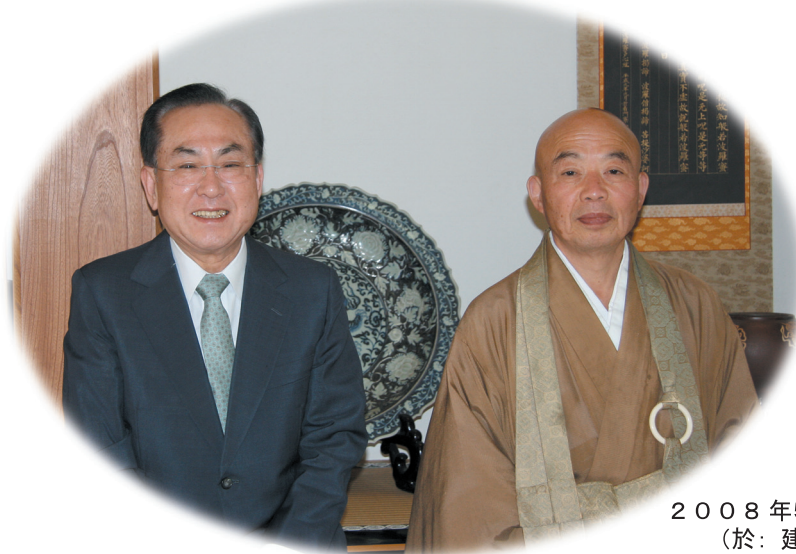
名手 訪問

吉田正道 (よしだ しょうどう)

対談 吉田正道 (臨済宗建長寺派第240世管長)

西川扇藏 ((財)日本舞踊振興財団理事長)

[敬称略]



2008年5月16日
(於: 建長寺)

西川 鎌倉には久しぶりに参りましたが、駅前辺りは随分と変貌したように感じられました。

吉田 観光地として近年この地を訪れる方が増えていますので、交通機関を含めてある程度は利便性をよくしてはいけないうちですね。

西川 本日は平日なのに大勢の人が駅前にいらっしゃいました。

吉田 以前から修学旅行で見える学生さんは多かったのですが、最近ではウォーキングクラブのようなグループの方々が見受けられます。

西川 それは大いに結構なことだと思います。古都を散策しながら健康志向にもなり一石二鳥ですね。

吉田 そうですね、本来この街は歩いて廻るようになっていきますから、必然的にそのような方々も多くいらっしゃいます。

西川 それにしてもこちらのお寺は大変広

大な敷地に悠然と佇んでいる感じで、しかも静かですらっしゃいますね。鎌倉五山といわれていらっしゃいますね。

吉田 室町時代に認定されたもので、もともと五山制度は中国から伝来されたものでございます。この建長寺も最初の住職は中国の方だったのです。

西川 やはり中国から結構影響を受けているのですね。

吉田 仏教が日本に伝来してから1300年位の年月が経っています。それ以前にも朝鮮半島からわが国へ入ってきたものもあるのですが、大体は中国との交流で広まっていったようです。

西川 私もつい最近久しぶりに中国を訪れて、多くの寺院を見学して参りました。しかし日本に戻ってしばらくしてあの惨事が報道されました。大変びっくりいたしました。

吉田 四川省の大地震ですね、本当にお気

の毒なことでございます。一刻も早く復興してほしいと願っております。

西川 まったくですね。

吉田 私も中国には幾たびか行っておりませんが、先年ご縁がありましてパキスタンを訪問いたしました。ここは仏像の発祥の地なんですね。

西川 インドではないのですね。

吉田 はい、仏教がインドからパキスタンに入り、そこで初めて仏像が現れたのです。

西川 現在われわれが見ることができる仏像と同じようなものですか。

吉田 はい、形は同じですが顔の表情は違います。鼻が高く立派な顔立ちの仏像です。

西川 なるほど。

吉田 それが段々中国に伝わり、さらに日本へ入ってきた頃には、顔がすこしずつ変わって、お地藏さんのように丸い顔になってきましたね。

西川 同じアジアの国でも違うものなのですね。私がかつて文化交流で伺ったベトナム辺りは我々日本人と良く似ていましたが。

吉田 そうですね、ベトナムやミャンマーはどちらかというと日本に近いかもしれません。インドからパキスタンとなると国土も広いですし、人種としてはやや異なるのでしょうか。

西川 そうなんでしょうね。

吉田 文化交流といえば、最近タイとカンボジアであちらの舞踊を拝見いたしました。

西川 それはお楽しみだったでしょう。アジアの各国は舞踊や演劇が結構盛んなのですから。

吉田 綺麗な衣裳を着られて、ちょうど灯笼踊りのような感じの踊りでした。大変素晴らしいものでした。

西川 おそらく相応に歴史があるものなのでしょう。伝統文化として根付いているのですね。

吉田 それぞれの国の気候風土に合ったような文化が昇華され洗練されて今に伝わってきているような気がいたします。

西川 仰るとおりだと思います。

吉田 それにしても近年はテレビの報道や、またインターネット等が発達しまして、さまざまな国の情報が身近に知ることができるようになりました。

西川 そうですね、実際に行ったことのない国のことも結構知ることができますからね。

吉田 そういう意味では世界が狭くなった感じがいたします。

西川 ところで禅の世界の修行というのはどのようなものなのでしょうか。

吉田 いわゆる24時間体制の修行なんですね。一日の流れで申しますと、日中は動き詰めです。作務（さむ）といまして、掃除から畑仕事、薪割り、そして托鉢にも参ります。朝晩は坐禅があります。

西川 大変なことなんですね。

吉田 慣れるまではつらいかもしれませんが。坐禅も静かな環境で精神統一をしておりますが、本当はどのようなところでも、銀座のご真ん中でも、坐禅ができなくてはいけません。

西川 気持ちの中でその境地まで行かないといけなわけですね。

吉田 日本舞踊の世界でも禅の修行と通ずるものがあるのではないのでしょうか。

西川 はい、舞台でも己がでてしまっただけでいいわけ、その役になりきるためにはそれなりの稽古を積みなくてはできません。

吉田 そうでしょうね。一呼吸一呼吸が流れるようにいかないといけませんね。

西川 自然体とでもいうのでしょうか、なかなか到達し得ないのですが、それを目指さないことには何も始まりません。

吉田 西川さんは人間国宝にまでなられたので相当修行を積み、ある意味目指された境地に達したわけですね。

西川 いやいやとんでもない。まだまだ芸道の道は険しいのです。日々精進の気持ちを忘れずに勉強していきたいと思っております。

吉田 素晴らしい心がけですね。

西川 恐れ入ります。

ところで管長の生い立ち、修行時代のことをお伺いしたいのですが。

吉田 私は岐阜の山奥で生まれましたが、父の遺言で寺に行くことになったのです。父が亡くなったとき私は8歳でしたが、知り合いの寺に小僧として行かされました。

西川 そんな幼いときから修行をなさったのですね。

吉田 まだ世の中のことも何もわからない子供でした。朝5時から夜まで毎日修行の繰り返しです。

西川 良く辛抱なさいましたね。



それがそうでもないのです。私は兄弟が5人いてその真ん中だったので、なんで私だけがこんな辛い思いをしなくていけないのかと素朴

に考えまして、しばらくして我が家へ帰ってしまいました。

西川 その年齢では無理も無いことです。

吉田 ところが母親に諭されてしまいました。亡き父の意思で寺に行ったわけだから面目が立たないと言われまして、あっさり一日で逆戻りです。

西川 それでまた厳しい修行の毎日に復帰されたのですね。

吉田 しょうがないですね、他に行くところはありませんから。しかし性懲りも無く1年くらい経った頃、それでもまだ小学校4年生ですから幼さはたいして変わっていないのですね。(笑)

西川 また脱走されたのですか？(笑)

吉田 このときは兄弟子で非常に厳しい人がいて、いじめを受けたのです。

西川 いつの時代、どこでもいじめは存在するんですね。

吉田 そうでしょうね、これは結構堪えました。しかし最早実家には帰れない、子供ながらに知恵を絞って選んだ場所が納戸でした。

西川 それは窮屈でしたでしょう。(笑)

吉田 はい、そのなかに大きな桶が置いてありましてそこに二日間居続けました。ところがお腹が空きすぎて、目が眩んでしまいました。(笑)

西川 (笑)

吉田 観念して納戸から出まして、師匠にさぞ叱られるだろうなと思っていましたが、逆に心配をしてくださいます。ああ二度とこのような馬鹿げたことはしないようにと自らに誓いました。

西川 それだけ日常の修行が辛く厳しいということなのでしょうね。

吉田 さすがにそれ以降は脱走はしておりませんが、毎日過ごす間にはさまざまなことがございます。

西川 現在の管長からは想像できないような幼少の折の思い出でございますね。

吉田 所詮まだ子供ですから考えることは他愛の無いことばかりです。やはりその頃でしたでしょうか、ある檀家の方から羊羹をいただきまして、帰ると皆に取られてしまうので、大事に藪の中に隠して置きました。それで翌日食べようとしてうきうきした気持ちで行って見たら、何と蟻に食べられてしまったんですね。驚くやら悔しいやらで、大分がっかりしたことは今でも鮮明に覚えています。

西川 それはなんとも残念なことでしたね。(笑)

吉田 食べ盛りのこども時分のことでしたからそのときは真剣だったのです。そんなことで小僧として過ごした後、道場へ入り更に修行を積むわけです。

西川 道場に入られたのはおいくつのときですか。

吉田 18歳でした。それからいろいろなことがございまして、やはり先輩から理不尽ないじめにあいました。

西川 お辛かったですでしょう。

吉田 子供の時分のそれとはまた違って嫌なものでした。ある時には堪忍袋の緒が切れて、手を挙げかけたこともあります。

西川 それほどまでに思いつめたのです。

吉田 そうでしたね。しかし師匠がよく言われていたことが脳裏に浮かびまして、それ以上には至りませんでした。師匠は苦しいことや辛いことがあってあれこれ悩んだら、己の頭へ手を当ててみなさい、と言われていたんです。

西川 なるほど。

吉田 そうすれば改めて自身の立場をかみしめるであろう、という教訓だったのですね。出家の身であることを確認せよ、ということですね。

西川 それは素晴らしい教えですね。

吉田 だから若い時には何度自分の頭を触ったか数え切れません。

西川 感情に流されてあらぬ行動を起こさないようにと、お師匠さんが教えてくださったのですね。

吉田 そうですね。しかし最近つくづく感じるのは、よくいじめてくれたなど感謝しております。そういう方がいたからこそ私は鍛えられたのだと思っているんです。

西川 お立場は違いますが、私もそのような経験をしていますので、今仰せられたお言葉は実感があります。

吉田 そういうことを通して人間は成長していくのですね。

西川



仇を恩で報いるという諺がありますがまさにそのとおりですね。何かお話ししにくいようなことまでもお聞きいたしまして恐縮に存じます。

吉田 私も以前ならば今のようなことは余り申し上げなかったのですが、お恥ずかしいか限りでございます。

西川 ところで建長寺のことで是非お伺いしたかったことがございまして、なんでもけんちん汁の言葉の由来はこちらのお寺であるということを聞いたことがあるのですが。

吉田 そういう説もありますが定かではありません。しかしかなり昔から建長寺

でけんちん汁を作っていたという事実はございます。たくさんのお野菜を油で炒めて塩や味噌で味付けをして皆に平等に振舞っていたようです。精進料理のなかでも非常に馴染みの深いものですね。

西川

吉田 とても栄養価が高いのです。それから素材をすべて活かしますので捨てるものが何もありません。理想的なお料理ですね。

西川 それからこちら建長寺では広大な敷地を活用されて、一般市民の方々と交流を促進しているようですが。

吉田 やはり皆様にお越しいただかなくてはいいませんから、皆で協力をしてそのようなことをやっております。今までにお能や音楽の鑑賞会をやりました。

西川 それでは是非、日本舞踊の鑑賞会も企画してください。

吉田 こちらこそお願いいたしたいと思っております。日本の伝統文化を一人でも多くの方々に触れていただきたいですね。

西川 由緒ある荘厳な建長寺で日本舞踊を披露できるのは大変嬉しいことです。

吉田 その折にまたお会いできるのを心待ちにいたしております。遠路ご足労いただきまして感謝申し上げます。

西川 今日は楽しい一時を過ごさせていただきました。お忙しいところお時間を作っていただきましてありがとうございます。

吉田正道氏 プロフィール

昭和15年、岐阜県山県市に生まれる。

小学校3年の春、尾張の寺へ小僧に出され、高校卒業までの10年間小僧生活を続ける。その後京都建仁寺専門道場へ入り、参禅修行。

昭和51年、竹田益州老師の法を嗣ぐ。

その後東京深川の寒光寺の住職を経て、昭和59年、建長寺塔頭同契院住職。

昭和62年、建長寺派第240世管長に就任。

現在、本派管長ならびに専門道場師家として雲水の育成に日々努めている。